
アルマダ！

富士堂あかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルマダ！

【Nコード】

N3795Z

【作者名】

富士堂あかり

【あらすじ】

ごく一般的…のはずの女子高生、椎名優はある日謎の男に渡された装置アルマダによって半ば強制的に変身してしまう。理不尽な要求をつきつけてくる飯島に怒鳴られながら優は悪の組織と戦うことに…

00＊雨

気がつければ夢中で走り出していた。いや、逃げ出していた。

雨が酷く降っていた。臭い立つ悪臭が流れて欲しいと思いながら全力で走る。向かう当てもなく。

呼吸が思うように出来ない。呼吸とは、なんだっただろうか。思い出せない、俺は、なんだ？誰なんだ！さっきまで、はっきり分かっていたはずだ、俺は…

景色は驚くくらい速く変わっていった。まるで他人事のように感じた。悪い夢だ、そうであってほしい。そうでなければ困る。

何が困る？困ることなど何もないではないか。しがらみから解放されたのだ。そうか、そうなのか？いや…

「嘘だ…」

通行人と目が合った

全身が総毛立つ。やめろ、違う、違う…

それは止める――！

次の瞬間、俺の世界は再び赤に染まっていた。

何故、こんなことになってしまったのか。何故、彼女が死ななければならなかったのか。

あいつの言った意味が漸く理解できた。これは危険だ。しかし自分ひとりではどうすることも出来ない。方法を探さなければ・・・そして終らせなくては。でなければ彼女の元にはいけない。

暗雲の中、獣は風の様に光の中を駆け抜けた。

01＊あんパン並びにヒゲ、そして

学校の床っていうのは走ることを前提に設計されていない。

「はっ・・うう・・っ！」

廊下を走ってはいけません、なんて念仏のように唱えられてるけどそれは優雅じゃない、とかマナーの問題なんかじゃない。とにかく滑る、危険なのだ。

普段から廊下を走っておけばよかった、と自分の真面目さを呪った。いや、真面目ちゃんかと聞かれたら迷わずいいえ、と答えるのだけど。残念ながら寝坊の類はしないただ、話がずれてしまった。さしあたっての問題。過去を気にしている時間はさらさらない。

「まったく：どうし、てっ！」

普通にグラウンドで走るのとは違う、上手く踏ん張れないし下手すりゃ転ぶ。けど今は安全に歩いていくことも転ぶことすら許されていない。

もし少しでもスピードを落としたら、もし転んだら・・・。心臓はばくばくしていて肺は裂けそうな位痛い。でも今は、とにかく走るしかないのだ。

耳にうるさい程の足の音、咆哮のようなそれを叫びながら化け物が

彼女の後ろにいた。

01.. あんパン並びにヒゲ、そして

どうしてこんなことになったのか、話は少しばかり遡る。

「…つごるああ待てええッ！」

「だから待てと言われて待つ馬鹿はいませーんっ！」

デジャブではなくて、（むしろ時間軸から考えたらあっちがデジャブだと思う）私は怪物に襲われる少し前、同じようにおっさんに追いつけられていた。

放課後、学校の前のパン屋さんで買ったあんパンを頬張りながら帰宅中、突然目の前に現れた怪しいコートのおっさんに話がある、だなんて言われ最近変質者の類が学校周辺をうろついているという先生の話覚えていた私は素早く反対方向の道へと走り出した…がどういふ訳だか変質者さんの琴線に触れてしまったらしく（間違っても

罵つたりなんかしてないし）おっさんと現在こうして追いかけてこ
してゐる次第である。

けど陸部の私が全力で逃げてるって言うのに振り切れないってどう
いうことなの？

ちらりと罵声の聞こえる後ろを見れば鬼のような顔したおっさんが未だ間合い十メートルを保ちながら迫ってくる。

「だああっ！このクソアマあ！止まれつつつてるだろうが！」

「と、止まったら何か……つ、はあっ！ 確かに、ヤバい気が……つ、するじゃないですか……！」

「お前が逃げなきやこつちだつて、つ、走らんわ！」

「いやだから貴方が追い掛けて、はっ、来るから！逃げて！るんです！」

「じゃあ今すぐ止まりやがれええええ!!」

「お断りします！」

ずっとこんな感じで追いかけてる次第で。歳を考えればあちらはおっさん、果てはこちらは学生。体力勝負ならこっちのものだと思つて校庭を三周ばかりしたその時、がり、と足元が揺れるのを感じて私はそのまま地面にダイブしたのだった。

「あっあああああ!?!」

ずしゃ、とアスファルトを数メートル滑る。

痛い、一瞬の間の後、やばい、そう思うのとほぼ同時に背中に思い切り衝撃が加わった。

「いたっ! ちょ、何するんですかっ! どいて下さい!」

とりあえず可能な限り手足をばたつかせてみるがお腹を固定されてこちらは腹ばい。背中にいるであろう重しはびくもしない。

「くそ…手間掛けさせやがって…たく、しかしいくら使える奴がないからって女かよ…」

「はあ!?! 意味わかんないんですけど! いきなり、追っかけてきて…はあっ」

背中に変質者が乗ってる。想像したくもない、と目をつむって、開く。頭に浮かぶのは最悪のケース、変質者に捕まった女の子は1誘拐される、2襲われる、3人身売買、4解体して内臓を売る…のどれかあるいはフルコース! 少なくとも1と2は必須な気がするけど、どうやらここで私の人生は終わってしまうようです。折角バイトしてお金溜めてたのにな、全部使っちゃえばよかった。

「…一週間後になってテレビでニュースになるんですね、行方不明の高校生、白骨化して見つかるって」

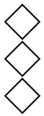
「…一応言っておくが俺はお前に用があつてこの町まで来たんだ。ついでに俺はお前に興味はさらさらないし間違つてもお前の考えるよーな下らないことをしにきたんじゃないやねえ」

じゃあなんだって言うんですか、出会い頭に本気で追い掛けてきて、地面を転がった女子高生に劳いの言葉の一つも掛けない鬼畜な人は。勿論そんなこと言ったら何か酷いことになりそうだったので少し考えてじゃあまず私の体から離れて下さい、そう言おうとしたその時、ぐい、と力強く襟元を引っ張られた。

ちょうど、体を起こしてやるように。

「こいつを使える奴を探しに来た」

そう言って、男は私の目の前に黒い螺旋を突き付けたのだ。



何か、具体的に形容するにはあまりにも抽象的な形だった。

男の手からぶら下がるそれは鈍く光を吸収していた。黒く、光沢を持ったそれは金属なのだろうか。筒状のそれは折り重なった金属やら透明なガラスを納めていて一見秩序のないちぐはぐなオブジェのよう。しかし、少女はその奇妙な内臓を納めている螺旋状の黒に目を奪われた。

黒の筋が二つ、DNA螺旋を思わせるそれに何故だか心ひかれた。

「…おい、いつまで黙ってる」

ぽこ、男の呆れたような声と頭に残る緩い衝撃。頭が妙に冷静になってどいて下さい、と言ったが男が背中から離れる様子はない。

目の前の螺旋が姿を消した。

「…あっ！」

「あまり時間がないんだ。ここで話するのは都合が悪い」

「あーもう分かりましたからどいて下さいよ、腰痛になったらどうするんですか…」

酷いです、としょぼくれたような声を上げれば男の呻くような声、

不本意なようで、のろのろと背中を離れた。

少女もゆっくりと立ち上がる。少しその場に静止して不意にくると男の方を見た。

「全く、女子高生捕まえて馬乗りですか、重罪ですよ重罪！」

「仕方ないだろ！緊急なんだよ！」

ところでここ最近学校の周りで無差別に生徒に話しかけてたのは？と勢いのまま尋ねれば男が目を丸くする。少しだけしまった、とでも言う様な顔をして広まってるのか、と歯切れ悪い台詞にホームルームで注意されましたよ、スカートの埃を払いながら言う男はそれきり黙った。

「でも私が聞いたのはマスクした男って、あ、あとなんで他の生徒でもなく私なんですか？それとそれ！黒いの、なんなんですか、私が見えるって「だあっ！だからここで話すのは色々とまずいんだ！……じゃあ話を聞いて差し上げますので何か奢って下さい、ね？」

「ーっ、わあったよ、大人しくしてろよ……だからガキは嫌いなんだ……」

「はーい！でもこんな歳が離れてたらカップルじゃなくて親子ですね、」

「おまっ——」

ドオオオオオオッ！！

瞬間。男の表情が険しくなったのに気が付くことはなかった。男の怒号も彼女の耳に届くことはなかったのだ。

地響きにも似たそれ。激しい爆発音が辺りに響き渡る。

見えたのは自分と同じく呆然と目を見開く男の姿だった。

「が、学校だ…何、ばくはつ？え…実験室かな、すみません！ちよっと見てきます！」

「あ、おいっ待て！」

男が再びシャツを掴んだ。なんですか、と振り向けば酷く苦々しく表情を曇らせた男。

「…これを持ってけ」

「は？」

「持ってけ！」

「は、はい…？それじゃ、ちよっと行ってきます」

腕を掴まれ強引に先ほどのそれを握らされる。真意は分からなかったがとにかく今は学校に行かないといけない。少女は受け取った筒

を握り締めて校門の方へと走って行った。



そろそろと正門を通る。この時間は生徒は皆帰ってる時間だ。誰もいないグラウンドは西日で赤く染まっている。爆発音がしたのだ、もし誰もいなければ自分が警察か何かに連絡しなければならぬ。音のしたのであろう方を見て、言葉を失った。

壁が壊れてる。

校庭の端、塀が一部分だけ途切れていた。白い塊が彼方に散らばっている。先ほどの衝撃音はこれのせいだ、大きく空いた穴は小さな車には余る大きさ。交通事故ならそうで質が悪い。誰も怪我してないからいいものを、轢き逃げと変わらないじゃないか、と携帯を構えながらふと、言いようのない違和感。

何か変だ、と漠然に思うものの何がおかしいのか、歩み寄り、瓦礫の山、しゃがみ込んだ刹那再びの爆音に思わず叫び上がった。

そしてその違和感の正体と原因を瞬時に理解した。

校舎の近く、コンクリートがえぐれている。そこには自分の何倍もありそうな大きな化け物が、こちらに視線を向けて立っていた。

瓦礫の山、タイヤの跡があるべき場所にあつたのは無数の窪み。否、その窪みの持ち主が今私を見てる。

「うばあ、あゝあゝあゝ！」

「——うわあああああああ——！！！！」

頭が真っ白になった。なんだあれば、なんだあれば!?

化け物、と形容する以外にいい言葉は彼女の混乱した頭の中には存在しなかった。咆哮を響かせるその怪物は遠くで自身がここに入り込んだ所でうごめく小さな存在に気が付いたのだ。どしん、どしんと地を鳴らしながらそれはどんどん近づいてくる。

「うばあああつ！！いい所にぎた、なああゝつ！何もなくて退屈してたところだああつ・・・」

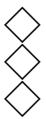
「・・・ひっ、いや・・・いやああああっ!!」

震える体を制止して校舎に向かつて走り出す。背中を向けてはダメだと直感で思った。追いかけてこなら確実に負ける。校庭の周りは高い塀で囲まれてる。登って外に逃げ出すのも上手くいきそうになり。かといって横に走るのも危ない。そうして彼女は一見して最も危険だと思われる方向へと走り出していた。怪物は獲物が自分から殺されにきたのだらう、赤い幾つもの目をぎらつかせて笑い出した。近づくほど奴が異常なほどでかい図体をしているのがひしひしと感じられた。そしてどんどん加速していることも。

そしてその時を待っていた、怪物が最も冷静さを失っている時を、自分が最も集中してる時を。

「うおおおおあああゝっ！！！！」

今だ！少女は踏み切り、体を回転させる。大きく一步を取った。そして獣の影が自分を覆った時に思い切り真横に体ごと飛び込んだのであった。



一瞬の出来事がコマ送りのように酷く長く感じた。上手く受身を取って素早く立ち上がる。ちらりと横目をやれば怪物は遠ざかっている。重いものを動かすのにはより大きな力が必要、止めるのにもそれ相応の力が必要。加速が止めばまた一からやり直しなのだ、

「ぬゝおおおっ！！小娘ええゝ舐めやがっでええええッ！！」

「っ！！！早く逃げなきゃ・・・いや、これ、外に出してもやばいっ！！！」

獣が再び運動を始めたのを背に感じながら考える。近くはすぐ民家だしあのデカブツがどこから来たのは分からないが町に放すのはあまりにも危険すぎる。

自分のこの危機的判断能力を疑いながらも気が付けば校舎に向かっていた。

足音が迫っている。ロープアーマのまま校内に入り込む。

「までええええええ小娘えええええ っ!! ぶちクロスウウ!!」

「っ! ああもうしょうがない! 殺してみたりや捕まえてみるからねこのウスノロ!! 女に追いつけないなんてだっさい牛さん!!」

言い切るより早くひときわでかい叫び声に耳がいかれそうになる。さあ、もう後には引けない。尊大なネズミは命がけだ。でも、きつと方法がある。そう思わずにはやってられなかった。

(・・・そうだ、屋上から落とそう! さっきみたくやれば・・・)

「おおあああああ っ!!!! もう逃げられねえ ぞおおおっ!!」

「・・・っ!?! うわあああ あっ!!」

いくら狭いからと言ってあなどっていた。怪物の言葉を聞くまで近

くまで来てることなんて気が付かなかった。恐怖に足がすくみ地面に投げ出される。

怪物とにらみ合いながら後ずさる。どすん、どすんと怪物が進む。

壁に触れながら、手が沈む。人一人入れるくらいの狭い横道。確か建設の時間違って作っちゃったとか・・たまに馬鹿な男子たちが入って遊んでいるのを見たことがある。

少しでも長く生き延びたかったからであろうか、怪物の終わりだ、という台詞を聞いた瞬間そこに入り込んでいた。三メートルくらいある。胸が問えたがなんとか奥に入り込む。

「ぐへへっ、本当にネズミみでえだなあ・・・」

「・・・っ」

だが後は詰めてくだけだ。怪物は悪臭を放ちながら叫び、唾液を飛ばしながらその狭い穴を広げていく。がりがりとコンクリートを崩していく音、すれすれまで迫っている獣の腕。

もう何処にも逃げられないではないか、どうして私なの。何も悪いことなんかしてないじゃないか。

さようなら、色々ごめんなさい、にじみかけた涙を堪えて崩れそうになる、刹那。

『ACTIVE TYPE ARMED』

機械の音がした。
時間が止まったような、それくらいその音は私の頭の中ではつきりと聞こえた。

走馬灯のようなものか、はたまたそれが文字通り私の頭に響いたものなのか、とにかく私は何が起きたか分からなかった。片足がおかしい。膝より少し上から何か機械のようなもので覆われている。これはまるで…

「おゝんなああゝっ！ぶっ殺してやるゝうううう！！」

「っ！」

選択肢など存在しなかった。

力の限り足を振り上げたのと時を同じくして物凄い衝撃に私は壁に打ち付けられた。

02＊アルマダ、或いは不法侵入

今日一番の衝撃だ、と煙の沈み始めた頃に立ち上がって外へと顔を出した。

廊下は窪地から放射状に爪あとを刻んでいた。怪物が受け止めたからかあまり被害は大きくはなかったが。

ぐったりと地面に倒れこんだ様子を見るとさっきの衝撃で伸びてしまったらしい。死んだのかどうかは分からないしあまり近くに居たくはなかったので伸びているのを確認し颯爽とその場を立ち去った。学校にいた理由は分からないがああ分じゃ退屈しのぎだったと思える。

大きな牛の角に無数の赤い目、体軀は数メートル、異常に強い力を持っている。あまり頭はよくないようだがあんなものを野放しにしていられる筈がない。

そして自分の身に起きたことも、だ。化け物をノックアウトしたあの現象。何が起きたかよくは分からなかったが、とにかく私の身にも不可解なことが起こっている。

あまりにもいっぺんに不可解なことが起き過ぎてどうしたらいいか、そんな悩みは疲れと空気を読まずに鳴るお腹の音で一遍に吹っ飛んでいった。

02…アルマダ、或いは不法侵入

「ふーっ、っ、か、れ、たぁー」

これじゃ明日は全身筋肉痛だな、と暖かい湯につかりながら思い切り体を伸ばす。食べた後すぐお風呂に入ると消化によくないって聞いたことがあるけど知ったものか、とにかく今日は疲れた。

薄緑色の湯に体を沈めていく。息が泡となって波面を揺らす。溜息をつく、今だ頭はショートしたままだ。

「明日も学校だけどうなるんだろう・・・地方紙に載るくらいのニュースだよね、警察も来るのかな・・・ってかあれ、伸びたまま置いてきちゃったけど大丈夫かな・・・なんか不安になってきた・・・」

「・・・ってか冷静に考えればなんでさっさと逃げなかったんだろ・闘牛士じゃないんだから」

「けどなーんで私のほかに誰もいなかったんだろ・・・あーもう、なんかむかつく」

入浴剤の甘い香りが鼻をくすぐる。とにかく今日は早く寝よう。こんな変なことがあって溜まるか。よくよく考えれば不可解なことが多すぎる。きっと夢に違いはない、それならばそろそろ覚めてもいい時間だ。そうでなければ別の夢にこんにちは、悪夢は記憶の彼方になる、はず

「残念ながら夢オチじゃねーからな」

がらりと窓が開いて夕方の男が再び登場した。



気が付けば男の頭はぐしゃぐしゃになっていた。自分の手には桶である。

誰がどうみても私が水をぶっかけた以外説明しないだろう。濡れ鼠になった男は怒っているのか、呆れているのか、微妙な表情。

「・・・お前なあ・・・!」

「いやいやいやおかしいでしょ! 何処の世界に女子の入浴シーンに生真面目な顔して入ってくる馬鹿がいるんですか! のびた君か!」

「だからガキに興味はないつつただろ馬鹿が! 追いかけてこの次は水か、あの後お前帰ってこなかっただろ、だから心配してやったつーのに・・・」

なんで私の家の住所知って、と零せば大人の世界には色々ある、と謎の台詞で濁される。この人、やっぱり危ない感じの人っぽいな、と男を睨んだ。

いくら興味ない、って言われても見られるのは癪だ、そう思い立ち上がって窓に手を掛ければ冷たい風に身震いする。

「俺の気持ち分かったか」

「寒い・・・」

「こっちは倍さみーんだよ! とにかくあの後どうした学校は何もな

かったのか？」

「えっ、それは・・・あの・・・」

「？」

どうしたって、そう口にして涙が出てきた。怖がって泣く暇なんて無かったのだから。

男のうろたえる声が聞こえた気がしたが時間遅れの涙は止まらず、ぐずぐずになりながら怖かったです、となんとか言葉にした。

のぞきじゃない、と風呂場までやってきたそのどこからどう見ても怪しい男はどういう訳か、濡れた髪を黙って撫でていた。本当は優しい人なのかも知れない、まだ、よく分からないけど。

「・・・っ、すみません、風邪、引いちゃいますよね」

「・・・お前が無理そうなら、少しは待ってやるが」

「あの、話、するって、言ったじゃないですか・・・部屋、二階なんです上で待っててください。すぐ、あがりますから・・・」

「・・・ちょ、」

「窓の開いてる方です、とりあえず、少し聞かせてください・・・もう、訳が分からなくて」

「いや・・・すまん、ちょっと」

「？あ、タオル欲しいですか。い、今持ってきます・・・」

そうじゃなくて、壁を登っていけってことなのか、と渋い顔で言われてああ、と少女は声を漏らしたのだった。



さて、とタオルを被った男が言った。

「その様子じゃ実際に見たようだから説明できることは説明するが、よく帰ってこれたな」

「あれは・・・一体、なんなんですか」

あの時校庭で見た怪物。ありえない、と先ほどまで否定してた自分がいたはずなのに。

男は唸って、顎を擦った。

「一言で言うと難しいが・・・名前は分らん。正体も知れたもんじゃねえが・・・とにかくあれは、いや、あいつらは紛れも無い怪物で楽しみで人を殺しちゃうよーな奴らだ、まともなもんじゃねえ」

「・・・あいつらってことはあの牛以外にもいるってことですか」

「残念ながら敵は軍団だ。数日前この町に来てるつつータレコミを貰った「ちよっと待って！それ、他にも協力者がいるってことですか？」・・・まあ、協力者といえばそうかな。あいつらを止めるために協力してくれてる仲間はある・・・がこうやって俺みたいに

実際に動いてる奴はいない」

確かに、あれと面と向かって戦おうなんて思う人はいないと思える。私だってもうあんなの近くにすら行きたくはないのだ。

「ところでお前に渡した奴。あれちゃんと持ってるか？」

「え、ああ・・・！ そうだ、あの、私、あれに追っかけられてるときにいきなり、機械？ みたいなのが・・・よく分からないんですけど足が変化して」

少女のたどたどしい説明に男は目を丸くした。驚き、そしてそれは感心したようなそれへと変化していった。

「そうか、いや見立て通りといえばそうだが・・・まさか使い方も教えずに発動させるとは・・・」

「ちょ、ちょっと！ やっぱりあれ、これのせいなんですか？ いきなりこのことで、よく」

「それは足だけ、か？」

言葉を遮られる。そうです、と一言返せばやってみろ、と差し出したそれを付き返される。やってみろ？ どうしてああなったかも分かっていないような自分に何を言ってるのだろうか。この人は無理をいいすぎなんじゃないか、と恨めしげに見ていれば気が付いたのか、渋い顔をされて、気合を入れてみろ、とまたまた無茶な質問。

「あー・・・お前、なんかスポーツやってんだろ、その時に、なんでもいいから集中するために毎回やってることとかないか。それがな

ければ目を閉じてそれに同調するように意識を集中しろ」

「無茶ばかり・・・いきますよ、あ、失敗しても何も言わないでくださいね。つかやり方知ってるならさっさと教えてくれたっていいのに」

黙って集中しろ、と男が言う。ゆっくりと目を閉じて掌のそれに集中する。冷たくて、不思議な感触だ。握り締めて、掌の感覚に集中する。暖かくなってる気がする。いや、確かに熱い。

熱くはなっているが、あのとさどうやって変身したかなんて覚えてない。何も変な感じはしていない。部屋の中は沈黙に包まれていてこちらを見ているであろう男の視線を想像してむずがゆく感じた。もういいですか、無理そう、と返事も聞かないで目を開けて、不敵に笑う男の顔と・・・そして体を覆う違和感に私の世界は再び時を止めた。

体中を何かが覆っている。視力は悪くないほうだがよりくつきりしている。マスクのようなものを被っていて中からではよく分からないが、恐る恐る掌を上げればあの時見たそれにそっくりの二本のグローブに覆われた腕が視界に入っていた。

「どうだ、初めて変身した気分は」

「え・・・これ、私、今どうなってるんですか、何これ！」

「落ち着け。あんまり暴れると床が抜けるぞ！しかし、くく、これが偶然じゃないってことはなかなかいいじゃないか！！いいか、椎名、今お前の体はアルマダで強化されてる。俺たちが持つ最大の力を持ったそれにな！アルマダは単なるオブジェじゃない・・・対怪物用のボディスーツだ。そして・・・まあみてみりゃ分かるが、お

前はこいつを使える数少ない適応者」

「ちょ、つまり・・・私はこれで、怪物を倒したってことですか。これ、あの、私、変身ヒーローの類に変身してるってことですかあ！！！？」

「そうだ、ま、あんなちゃちなもんじゃないが・・・とにかくお前さんにはこれから俺に協力してあの怪物たちと戦って貰う。被害が出る前に食い止めるのが俺達の仕事だ、いいか？」

アルマダ、と男が言った。この筒の名前だろうか。

掌から筒は消えていた。腰のベルトに筒だったものが電子光を放ちながらついている。

もし断ったら、その言葉に男は言う。お前が想像できる最悪のケースになる、と。

戸惑った、しかし、断れる気がしなかった。ゆっくりと頭を縦に振ればにやりと笑って男が掌を差し出す。

「俺の名前は飯島英二、お前のサポートをしてやる。お前も・・・一応名乗っとかなきゃ気持ち悪いだろ？」

「・・・しいな、椎名優です」

「よし、それじゃこれからよろしく頼むぞ」

「が、頑張ります・・・飯島さん、よろしくおねがいします」

「ちょっと待て、さっき怪物を倒したったよな」

飯島さんの視線が痛い。何かまずいことを言っただろうか。だから

キックしたら気絶しちゃいました、そういいきった瞬間飯島さんのグーパンが私の頭ごとマスクを揺らしたのであった。

「ひ、酷いです飯島さん・・・いきなり、ぶつなんてっ!」

「うるせえ!! どうして止めを刺さなかったんだよっ! まさか学校においてきたのか!! 今すぐ行くぞ!」

「え、もうパジャマなんですけど・・・」口答えすんじゃないええええええ!!」ひいっ! わ、分かりましたあ・・・っ!」

残念ながら私のお話はこれからだったようです。女の子はスカートを履いた魔法少女になるものだと思っていたのですがどうやら私の場合は違うようで、少し怖いおじさんに言われるまま

残念ながら学校はぼろぼろのまま怪物の姿はなかった。私は正直よかったと思ってるけどまたグーパンを食らったのは不本意でしたけど。とにかく本当にこれが始まりのようです。私、今日からヒーローになりました。



何処の暗闇か、だだっ広く何にもない場所がそこにはあった。

いや、何も無い、というのは少々語弊がある。その、酷く暗い空間の中、それは居た。

「随分と見苦しい真似をして下さいましたね」

部屋の中、ひときわでかい図体のそれに向かって男が言った。毛む

くじらの体からは立派な角が生えているが酷く汚れている。ところどころ血が滲んでいて彼の体臭と交わって酷い悪臭を放っていた。

「うう、ううう、いきなりのごとで、ぐうう」

「やはり貴方を自由にするのは間違いのようですね・・・現段階ではなるべく事は隠密に、と閣下のご命令です。次失敗したらどうなるか・・・クククッ」

男の笑い声にびくりと毛の塊が怯える。体軀の差は明らかなのに、獣は見るからに怯えていた。男の笑い声に釣られて他の笑い声が混じる。其の中で一人、腕を組んで一部始終を見てる別の男が居た。

「ギルスティン、ビークを責めるな。ビークも悪趣味なことばかりやってるからそうなるのだ、遊びでやってるんじゃない」

其の言葉に獣は再び身を縮こませる。先ほどまでそれを誇っていた男はごきりと首を回して大げさに手を広げてそうして暗がりに向かって歩みを進めた。

「おっと、私はその点に関しては貴方に賛同は出来ませんね。堅物のオウズウェル殿、少しなりとも楽しんではよいではありませんか・・・？」

「・・・やりたければ勝手にやれ、私は責任は取らんからな」

獣は男が暗闇の中で消えるまでじっと見ていた。瞳に怯えの念はなかった。かわりにそこには獲物を見たときに見せるぎらぎらとした赤黒い意志があった。

「ぜっだいに・・・次はぶっ殺しでやるうゝ・・・!!」

次は期待している、そういうも既に外の音など聞こえていないようだ。ずんずんと小うるさい音を立てながらビークもまた暗がりへと消えた。

考える、奴を好き勝手させたのは確かに失敗であった・・・が、ビークを一撃で倒した者とは一体何者なのであろうか。今まで自分達にまともに反抗できたものなど皆無と言っていい。恐らく不意をつかれたのであろうがしかし、放って置いていい案件ではなさそうである。計画の邪魔になる可能性はなるべく早く消したほうがいい。早急に手を打たねば、と男は重い闇の中へと姿を消した。

03＊監視者と覚醒（前編）

「ん・・・んー、う？・・・うーん・・・」

目覚めはあまりいいものではなかった。体中妙に痛い。そういえば、と優は昨日のことを思い出してああ、と一人納得したように息を漏らす。恐る恐る枕元を見れば今までなかったそれが優の目に入った。アルマダ、と飯島さんは言っていた。このなんだかよく分からないもののせいで昨日は散々な目にあったのだ、いや、もしあの時これがなかったら今頃どうなっていたかは分からないが・・・。とにかく優にとって重要なことが昨日のこと、変質者だと噂されてた男からこれを受け取り、学校で怪物に襲われ、そして命がけで退治したこと、それらが全て夢じゃなかったということだけだ。

あの怒涛の出来事から昨日の今日、今日くらいはゆっくり朝寝坊したい気分であったがタイミングよく一階から母親の呼ぶ声が聞こえてしまったのでしぶしぶ布団から這い出て、ふと、枕もとのそれを手に取り姿見の前に立つ。目の前にはぐちゃぐちゃの髪でたるそうにしてる自分がいる。優は緩慢な動きで手を伸ばし、言った。

「へ、へんしーん・・・」

彼女のけだるげな言葉に対しそれは昨日と同じくぎちぎちと奇妙な音を立て鏡に映った自分の姿を変えた。変身ヒーローとはよくいったものだが、言うなればこれは仮面ライダーって奴に似てる。話はそんなにしらないけど、なんとかレンジャーみたいなのはそっち寄りだ。

でも普通、女だったらひらひらのスカートと魔法の杖なんじゃないだろうか。いや、あんな恥ずかしい格好出来る気はしないけど・・・だからといって男の子の憧れるようなヒーローがいいわけじゃない。

科学的な21世紀、実用性で見ればこっちのがいいのかもしれないけど。

「どうみても中に入ってるのが女だとは見えないよね・・・」

自分の身長を呪った。確かにでかいほうだけど、そんな時なかなか降りてこない母親が痺れを切らしたのか先ほどよりも大きな声でご飯、と催促する言葉が耳に入って優は慌てて部屋を飛び出したのであった。

03…監視者と覚醒（前編）

あまり期待はしてなかったのだが学校はやはり昨晚のままだった。夜遅くに飯島と学校に忍び込んだ優には閉められた校門も、沢山のパトカーも、いたるところに張られた危険立ち入り禁止、と書かれた黄色いテープもそこまで驚くほどのものではなかった。

とはいえ校門の前でたむろする野次馬はなかなか凄い、他の生徒よろしく優もその集団の中に頭を埋めて人を掻き分け校門のところまで踊り出る。先生の帰りなさい、という言葉や生徒の面白がる声、その中に例の変質者のせいだ、という言葉が聞こえた気がした。飯島さんがやったのだったらまだマシだっただろう、いや、たちの悪いのに変わりはないけどさ。

ひとまずこれで今日は休校だ、そう思って集団から抜け出したとき、ぺしりと何かに頭を叩かれてああ、と優はその男を見上げて言った。

「おはよ、先輩」

「随分呑気だな、お前学校見たのか？」

呆れたように男がそう言う。周りの人たちと同じように制服を来たその青年、名前を皆川敬といい優と同じ日野高に通う高三だ。家が隣、そうなればそれなりのお付き合いをする訳で家ぐるみのお付き合い、所謂幼馴染という奴なのだがこれが勉強スポーツなんでも出来ておまけに結構な男前なのである。長く付き合ってるのだ、別に異性として好き、とかそんなのはないけど、まあ自慢のお隣さんだ。

「だってあんな人いたらよく見えないし・・・先輩は知ってるの？
中のこと」

「え、いや・・・俺も詳しくは知らないけどなんでも凄いらしいぞ、
トラックが突っ込んだみたいなの、あと校舎の中も酷いって」

ふうん、となるべく自然に相槌を打つ。実情を知ってるだけに辛い。トラックじゃなくて大きな牛の怪物なのだと漏らしてしまいたい気分だったがそんな夢みたいな話、何も知らないということにしとけというのが飯島さんの命令だ。取調べとか受けたくないし。話を逸らすためにもう帰る？と振ってみると敬は少し妙な顔をして、

「お前、今日は珍しく大人しいのな」

「何が？」

「いつもはこういうの喜んで頭突っ込むだろ」

「え、だって・・・その、トラックがつっこんだんでしょ、それなら別に」

ああ、その視線が痛い。このまま下手に言い訳するのはあまり得策じゃない、とだって学校休みだし、そう言って敬の前に行くように歩き出せば全く、と呆れるような声。とりあえず撒いた、と妙な確信をしてそのまましぶしぶと言った様子で付いてくる敬の数歩先を行きながら帰路に着く。

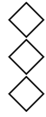
「なあ優、」

「何？どっか寄ってく？」

「あのさ・・あんま変なところうろするなよ。お前いつても何かやらかすだろ、最近物騒だし、人のいないところか夜一人で出歩いたりするなよ」

「なんで敬ちゃんがそんなこと言うのよ、先生じゃあるまいし」

それは、言いかけてそれきり敬は黙った。そんなに危なっかしいのだろうか、心配してくれるのは嫌なわけではない、けど一番守れそうにないことだ。その物騒なものと戦わなくちゃいけない。ありがとう、と照れくさくなりながらもそう返せば困ったように笑う敬がいて心の中でそつとごめんね、と謝った。



「この町には高い建物が全然ありませんね・・・」

小さく蠢く人間たちを見下ろして奇妙ないでたちの男がそう言う。

眼下では小さな虫けら共が必死に我々の跡を探している。あいにくと物を直す力を持った者はいないのだが別段知られて困るレベルのものではない。言葉を向けられたであろう男は崩れたコンクリートの山を睨み付けていた。

「・・・オウズウェル様？ いかがなされましたか」

オウズウェルと呼ばれた男はいや、と踵を返す。突風が吹きばさりとボルドーのマントが風に煽られ男の姿を太陽の下に晒す。暗褐色の体は硬質の殻に覆われ鋭い爪は人間の肉などいとも簡単に裂けてしまいそうだった。肉の甲冑を着込んだそれは重たげな見た目に反し酷く静かだった。一緒にいた男は畏まって地べたに膝をついた。

「エイダオース、お前ならばこの町をどう攻略する？」

「は・・・、そ、それは私めに任務を、という意味でございましょうか・・・」

「たとえばの話だ。しかし・・・うむ、一度お前に一任するのもよいだろう。しかし事は隠密に、との閣下のご命令だ。ビークのような愚かな真似は許されないぞ・・・ネズミがいるかもしれない、十分気をつけるのだ」

しかしネズミ、とエイダオースは返した。我々に逆らう分子など存在しようがない。ビークの噂はエイダオースの耳にも入っていたがビークは見た目どおりの奴だ、油断や慢心が引き起こしたに違いない。下手したらこけて頭を打っただけで言い訳としてその幻を作り出したのかもしれない。とにかくビークのことだ、そう深く考える必要はない。楽観視しているエイダオースに反し、オウズウェルは渋い顔をするばかりだ。

「エイダオース・お前なら肉を集めるのもたやすいだろう。そして万が一にもそのネズミの足取りが掴めたら殺してしまっただけで構わん。好きなようにやれ」

好きなように、その言葉にエイダオースの体が僅かに揺れた。

「たとえどれほど微弱な可能性であろうと閣下の邪魔となる存在は許しておけん。さあゆくのだエイダオース」

仰せのままに、下卑た笑いを浮かべてエイダオースは町のほうへと向かう。

「・・・私の気のせいだといいが・・・」

残された男はそういい残して闇に消えたのだった。



「で、なーんでまた飯島さんがいるんですか」

立派な不法侵入罪ですよ、来るなら来るで電話でもメールでも寄越してくださいよ、と彼女は部屋の入り口に立ってうんざりしたようにそう言い放った。窓を開けっぱなしにしとくお前が悪い、と悪びれもせず言う飯島に返す言葉も思い浮かばないので鞆を投げてベツトに腰を下ろした。

「てか何でこんな時間に・・・あ、狙いは下着ですか、やだ飯島さん

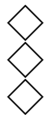
のエッチ」

「違い！だから・・・いや、もういい。あの分じゃ授業なんてやってられねえだろ。いや、帰ってこなくても待ってる予定だったが・・・」「あの、いちおう私、年頃の女の子なんですけ」とにかくこっちもののろろしてられねえ。見回りすんぞ、嗅ぎ回ってる奴が見つかるかもしれねえ」

この人は人の話を遮るのが好きらしい、優は暫く飯島をじっと見て、はああ、と大きく溜息を吐いた。

「普通こういう日って自宅でおとなしく勉強する日だと思うんですけど」

「まともに家にいる奴なんているわけないだろ準備できたら行くぞ」拒否権なしな訳ね、ひとでなし、と呟けば聞こえてたらしく優の頭に鉄拳が飛んだのだった。



制服のままうろろするのはまずい、とのことで私服に着替えて町を歩き回っている二人だったが昨日の今日のこと。別段変わった様子も怪しいところもない。

「ね、飯島さん」

「なんだ」

「本当にあてもないんですね」

「あてがあれば苦労はしないぞ。最近の若い奴はそうやってすぐ結果に走る。お前忍耐力ないだろ」

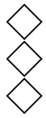
失礼な、と優が拗ねたように睨み返す。繁華街をこうしてうろついている訳だが怪しいところとかいつもと違うところなんて全然ない。

「・・・あの、飯島さん」

「もしこの先またあんなのと戦うことになったらテレビみたいで敵の前で変身しちゃっていい「訳ないだろ」・・・ですよね」

「一応責任者だから言っておくが敵に正体がばれて困るのはお前だけじゃないんだよ、俺が敵だったらお前を消すためにはどうすればいいか分かるか。お前は家族や友達を人質に取られてもいいのか」

現実とフィクションを混同するな、ペしりと頭を叩かれて飯島が先をゆく。商店街を抜けてすぐ、大きな公園がある。そういえば小さい頃はよくここで友達と追いかけてこやら砂遊びやら一日中遊んでいた気がする。中学に入った頃には自然と足が遠のいてしまったがなんとなく、足がそちらに向く。飯島さんもそちらに行く気があったらしく何も言わない。



「子供だからかと思ってましたけど、結構大きいですね、ここ」

「ん？ ああ・・・確かにでかいな」

思い出はおぼろげで、こんなあったつけ、と優が見て回る。時間のせいか小さな子供をつれた母親が沢山居た。いたって平和、優は正直このあてもない探索に飽き飽きしてたので思い出を確かめるように一つ一つ見て回った。飯島は自分達が場に不釣り合いなことを感じて居心地が悪そうに見えた。

「おい、他のところ見るぞ」

「まあここらは人もいっぱいいますしもう少し奥見ましょうよ、向こうに木とかいっぱいありますよ」

「ああ・・・っとすまん、ちょっとトイレいってくる」

えー、とわざとらしく言う優ににらみを利かせて黙らせる。私は遠慮します、先に行つてますからさっさと済ましてきてくださいね、そう言つて公衆トイレから離れた。

遊具のある広場から少し先、小高い山のようになったそこは雑木林が幅を利かせていて木漏れ日がきらきらと光っている。暗くなると結構怖いんだよね、とまだ青みを残したはっぱのヴェールを眺めながらゆつくりと歩く。

ふと足元を見れば、どこもかしこも植物の芽で覆われてる。長いことここに立ち寄ることはなかったが、こんなに葉っぱだらけだっただろうか？ 見なれない種類の葉だった。でたばかりの芽からは妙に長い弦が地面に向かって伸びていた。

「おねーちゃん、何してるの？」

その時、自分を見上げる少年の存在に気づく。腕白そうなその少年はこの時間には見慣れない存在に興味を引かれたのか、ぐるぐると優の周りを回った。探検ごっこだよ、と人差し指を立てて目線を合わせてやれば目を輝かせて僕も、とねだった。

「何、さがしてるの？」

「んふふー何かな、何が欲しい？」

「んん・・・なんだろ、わかんないや」

私も知らないの、と優はあっけらかんと言う。今日はこのまま見回りはやめてもう少し少年につきあってあげるか、そう思いながら歩いていく優は、視線が下に下がっていた為か、地面を覆う芽が夥しい量になっているのに気が付いた。芽は数を増し、大きく、太くなっている。その時、植物が恐ろしいスピードで生長してゆき――

「だめーっ!!!!」

とっさの行動だった。少年を突き飛ばしたのはよかったが、急激に大きくなった弦が腕に絡みついた。突然の衝撃に呆然とした様子の子供だったが目の前の異様な光景にわっと泣き出した。植物は尚も異常なスピードで伸びてゆき気が付けたところ絡み付いて動けない。植物がコンクリートを割って芽を出したなんて話を聞いたことがあるがそんなものではなかった。泣き叫ぶ少年に逃げて、と力の限り叫べばぐちゃぐちゃの目でこちらを見て走り出した。よかった、そう安堵するもさしあたっての問題、飯島さんはこんな時何してるんだ、となんとか腕を動かして携帯に手をかける。

電話帳を開き、発信を押した刹那、今まで絡みつくばかりだった蔦が思い切り手を叩いた。

「あぁっ!!」

弧を描き、そして植物だらけの地面を滑る携帯。

「困るんだよねそういうことされると」

「！」

背筋に悪寒が走った。声が、自分の真後ろから聞こえる。やはり何か居る、無意識に身を硬くしていた。

「残念だがこれでお譲ちゃんが助かる方法はなくなった・・・警察か？だが到着する頃にはもうここには誰も、いない！」

声が強くなる、それと同じく体に絡みつく力も大きくなり息が苦しい。頭の中は恐怖で一杯だった。このままでは変身する前にやられてしまう。一度これから逃れなければ、しかしどうしようもないではないか！背後に居るであろう男は姿を見せることもなく続ける。

「非常に困るんだ、オウズウェル様がわざわざ私に任せてくださった任務、邪魔されたら非常に困る・・・」

「あぁぁっ・・・っくう・・・！」

「ふふ・・・痛いかな？苦しいかな？ガキと違ってお前はモルモットにはならないが、折角若くて可愛い女が手に入ったんだ、少しくらい楽しんだって任務に支障はないだろう？」

がばりと植物の蔦をまとめたような、そんな腕が背後から現れ優の

体に触れた。しるしると蛇のように蠢く蔦が太ももをなで上げる。悪寒がした。正気の沙汰と思えるわけがなかった。

「や・・・やめて・・・！」

「そうだ、もっと泣き叫べ・・・！いくら声を上げたって誰も助けにはこないのだから！！アーツハツハツハ・・・！！」

せめて一瞬でも蔦の力が緩まれば、もはやここで終わりなのだろうか、

諦めかけたその時、木の陰から何かが飛んできて。

「っ！？な・・・うわあああっ！！！」

どん、と何か鈍い音がして蔦が緩む。振り返って優はそれが飯島自身だったことを理解した。捨て身の攻撃だ、私は逃げられるが危険が増す。吹っ飛ばされた怪物はこの間ほど大きくはなかったがこれらの植物全部が体だと思える。

「てめー何女子供狙ってんだ？」

飯島さん！優は呆然とする。お前は早く逃げろ、と地面に倒れた飯島の言葉にはっとしてすぐに走り出した。

変身して戦わなければ、飯島さんが、子供たちが危ないと・・・

飯島たちが見えなくなるまで走った、誰も居ないことを確認してアルマダに手をかける。気合入れる、そう強く念じて思い切りそれを突き上げた。

「変身っ！！」

04＊監視者と覚醒（後編）

変身、画面の中のヒーローたちは口々にそう言う。おそらくそう言うのはかつこいいからとか、子供が真似しやすいから、とかそんなありふれた理由からだろうけど、少女は理解した。

言葉はある種のスイッチなのだ、考えを、思想をより容易に、そしてより強く具現化する。飯島の言ってた集中こそこれが一番彼女にとって容易で、分かりやすかった。

掌の中のアルマダが強く光る。黒の螺旋に収められた機械たちに色とりどりの光が駆け巡る。光の流れが彼女の体を駆け上り、次の瞬間、全身に半透明の膜が現れ、そして具現化する。体中を覆う銀色のそれを確認して優は走り出した。

04…監視者と覚醒（後編）

飯島は酷く動揺していた。このような生物が世に存在してもいいのか、と。不意をつけたからこそ優を助けることが出来た。しかし、目の前でこのろろと立ち上がるそれが発する言いようのない殺気に汗が出るのが分かった。

植物を模したそれ、優の遭ったという牛の怪物とは全く異なる種類の怪物、それが周りの植物・・・正確にはその分身体だろうが、ただでさえ夥しい量のそれが今この瞬間も地面の栄養を吸い上げ数を増やしてる、地上のどの生物をも凌駕する能力を持ったそれ、自身が倒すと誓ったもの。

「貴様・・・人間の分際で・・・私に・・・！」

あの時切れたのか、細い弦からはどろりと薄黄緑の液体が地面に繋がっていた。生臭いそれに飯島は顔をしかめた。その様子が怪物の苛立ちをいっそうに増やす。とにかく時間を稼がなければ、優が戻ってくることを待つしか方法はない。

「下種ななりに変わらず随分とひでえ臭いだな」

「貴様・・・そんなに死にたいのか・・・！」

「は！残念だったな・・・もうこの公園には俺とお前、二人っきりだ。他の奴は皆避難させといた、お前の計画とやらは全ておじやんだ」

怪人は飯島の言葉に自身を忘れていた。何よりも任務の失敗は自分の身が危うい。こいつを生かしておいてはならない、また明日になれば人間の子供などいくらでも手に入る、ただ今邪魔なのはこのふざけた男だけだ。成長させた鳶を今度は手加減することなく男の腕に、腹に、首に巻きつけていく。本気で殺す気なのだと思飯島は思った。このままでは首が折れる、かと思えば力の増加は止み、むせそうになる。

目の前では怒りと、そして薄気味悪い笑みを浮かべた怪物がこちらを見ている。

「自分のやったことを後悔しながら死んでいくんだな。関わらなければもう少し長生きできたのにな・・・くく、アッハッハハ・・・」

笑い声が遠のいていく。くそ、まさか逃げたのか、と戻らない女のことを考えるも意識はぼやけていき、

《後悔するのは貴様自身だ》

飯島は声を聞いた気がした。ノイズの混じった男の声だ。幻か、そう思ったが声を聞いたのか、自分と同じく信じられないといったような顔をした怪物の姿を見て確信した。

最初それは男が死ぬ間際に発する最期の言葉かと思っていた。しかし目の前の男とは全く別の声である。ノイズの混じるそれは現実のものか、男の息の根を止める一歩手前、漠然とした気味の悪さに辺りを見るも、何もない。

「・・・なんだ・・・？」

《昨日の奴と一緒に間抜けだな、貴様》

「貴様っ！何処にいる！姿を現せええええッ！」

こっちだ、声のしたほうを振り返りエイダオースは目を疑った。男と自分の間、全身を硬化ボディで覆った奇妙な男が立っていた。手には男を縛り付けていた蔦である、そして自分を一瞥しぶちぶちと人間の手ではどうすることも出来ないはずのそれを引き千切り投げ捨てた。

その、濃い青のゴーグルをしたそれを見て理解した、ビークの言葉は嘘でもまやかしてもなかった、と。

オウズウエルという言葉が甦る。ミスは許されない。

「貴様・・・ビークをやった奴か？」

無意識のうちに間合いを取っていた。自分の臆病さに嫌気がさした、ビークを倒したからなんだというのだ。所詮人間、奴を倒したのは運がよかっただけ、何よりの理由はビークの止めを刺さなかったということだ。

仮面の戦士はじつと此方を見ながら間合いを詰めようとする。

《ビーク・・・？質問に答える義理はない・・・がお前もすぐに同じようにしてやる。い・・・おっさん、アンタの出番はおしまいだ、後ろ、下がってなっ！！》

刹那、エイダオースの腹部に鈍い衝撃が走る。自身の慎重さに助かったか、飛んできた拳底を受ける瞬間背後の触手で身を引いたのがよかった。拳が当たったであろうそこは身が切れ、体液が滲んだ。ビークがやられたのは偶然じゃないかもしれない、と考えを改めた。そしてそれは自分にとって非常にまずい、あれは頭はめっぼう悪いが身体の頑強さやパワーは低いものではない。自分の防御力ではあまり戦況は思わしくないではないかと。

《どうだ、降参する気になったか？》

優は自分が意外にも上手く立ち回ってること他人事のように感心した。いくらあれに立ち向かえるほどの力を持っていたとしても先ほど生身で受けた攻撃、そのとき辺りの鳶が攻撃してこないことに気が付く。本体に力を集めるためか、或いは動かすほど集中してはいないということか、

相手は昨日ほど危険そうではない、心を固めて一定の間合いを保つ。しかし昨日の爆発的な力が出ないのは何故だろうか、思い切りねじ込んだはずなのに。

防御に徹する怪物に何打も与える、優勢なように見えるが。

「ふっ・・・ふふふふ、愚かだな」

《・・・何が可笑しい》

突然怪物が立ち止まり、酷く可笑しそうに声を上げた。

「確かにパワーは認めよう・・・お前の勇気もな・・・しかしまるでなっていない、ど素人だ。ただ殴るだけしか脳がない」

優は息を呑んだ。それを悟られることはあまりいいことではないことなど明らかだった。自分が戦闘慣れしてるなどうぬぼれる気はなかったが。

《・・・っ！》

「やはりビークを倒したのは運がよかったただけだな。ほおら、このままでは私に傷を負わすことは出来ないぞ。お前の分かりきった攻撃も最早無意味、ラッキーパンチもう無意味となった」

《傷が・・・塞がってる・・・？あ、ああっ！！！！？》

植物の再生力を舐めて貰っては困る、エイダオースは笑みを、余裕を取り戻した。敵の程度が知れたのだ、そして負ける筈がない、めばしい養分は全て収めた、防戦一方だった時彼は張り巡らせた自身の触手で公園中の養分を探し回っていた。そして思い切り背後から一番の触手を奴の首めがけて発射した。

「さぁお遊びはここまでだ、お前には死んでもらわねばならない、最も我々の障壁になるようには思えないが・・・オウズウェル様への手土産になる」

吊り上げ、奴の体が宙に浮く。地に足が着いてなければ力を込めることなど出来ない。分身を引き千切られたのにも意味があった、奴の力を持ってしてこの呪縛からは逃れられない。しかし人間以上に

丈夫な奴だ、ビークと同じようにやられてたまるか、

《う・・ぐううう・・っ、はあっ・・ああ、っ！！》

「死ね」



あの力が欲しいと思った。

体中痛いし、息は出来ないし、いいことなんて何もない。あるとすれば苦しみ、迫り来る死は昨日の出来事を思い出させた。あの男に出会いさえしなければ私は平和に暮らせたのではないだろうか、と。否、現実の不幸はまやかしではない。誰かが必ずこの苦しみを味わうのだ。逃げることなど出来ない、そしてこの消しがたい呪いにも似たそれは必ずいつか見なかったものの前に現れる。その時こそ呪いの終わりなのだ、呪いが呪いとして役目を終える。増大した汚物は消しがたく何故、と人々は見なかった過去を呪うのだ。

《う・・・・》

だが、逃げなかったではないか。逃げようと思えば逃げられたじゃないか。

それは私の決断なのだ、捨て身で私を助けてくれた飯島さん、あの時私は逃げる事が出来た、けどしなかった。

何故、答えなどどうに出ている。

「もはや口も利けないか・・・お前は私の養分にしてやろう、全て

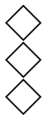
エイダオースはそのときとっさに力を込めていた。その苦しむ姿を、理解しがたい姿を見てられなくなったからではない。敵の様子が何かおかしかったからだ。熱した鉄のように熱い。それだけでなく、強化スーツが光っている。体を流れるように青い光の線がエイダオースの視界に入り込んでいた。それまではなかった身体の模様、最早自身では処理できぬ熱量、その時同じく青に染まったゴーグルがこちらを見下ろしていた。

《ACTI・VATE・》

ぶち、ぶち・・・と奴の手によって触手が、

「やめろおおおおおおおっ！！！！」

次の瞬間優の体は宙を舞っていた。



「なんなんだ貴様・・・どこまで抵抗すれば気が済むんだ！くそっ！！」

《最初に・・・言っただはずだ、後悔、させると！！》

異物が空から自分目掛けて降りてくる。信じがたかった、しかし何よりもあんな攻撃、しかも今度はもっと早く強力な一発が来る。あんなエネルギーの塊を受けたら体がもたない、逃げようか、しかし敵を目前に逃げたのなら、エイダオースは公園中の根を引き下げて

体を硬くする。自身の殆どをまとめ一本の太く鋭いそれに変え同様に落下してくるそれに向かって発射していた。

「串刺しにしてやるあああああああ！！！！」

《終わりだっ！！》

奴の拳と自身の渾身の一撃がぶつかる。次の瞬間感じたのはそれが熱でどんどん分解されていく感覚だった。何故、人間風情が、どうして私の邪魔をするんだ、

大きかった体がどんどん燃えていく、本当に死んでしまう、しかし実情はその高エネルギー体はある時を境に感じられなくなった。目を開ける、目の前には焼け落ちた触手と、両腕を失った自身を見下ろす悪魔の姿だった。

《・・・さあ、これで分かったろ、後悔させる、と》

「うわあああああああっ」

逃げ出していた。地べたを這い蹲りながら、エイダオースは恨んだ。あんなに強いものだとは思っていなかった。自分ではどうすることも出来ない。戦闘の実践だって殆どない自分が勝てるわけがない、と言いつつしながら。仮面戦士が追いかけてくる様子はなかった、不意に何かに遮られ見上げた、そして絶望したのだった。

「エイダオースよ・・・何故逃げる？」

「あ・・・ああああ・・・」

目の前には自分を見下ろすオウズウェルの姿があった。気配など感

じられなかった。こんな見苦しい姿を見られたなんておしまいだ、
オウズウエル視線は氷のように冷たい。

「ふん・・・貴様、人間一人に何をてこずっているのだ？」

マントの男がぼろぼろになった植物を睨み付けた。驚いたのは優たちである、エイダオースと呼ばれたそれは今まで、圧倒的な劣勢でさえ見せなかった姿を優たちの前で晒したのだ。

それは地面に跪いてがたがたと怯えている。

「す、すみませんっ、すみませんオウズウエル様！」

「お前に任務を与えたのが間違いだったな・・・肉の確保も、ネズミの始末も満足に出来てはいないではないか！」

「お許しを！お許しをオウズウエル様・・・！」

無様だな、とオウズウエルと呼ばれた怪物が男を罵った。冷たく、静的で、しかし優も、影で見えていた飯島も動くことが出来なかった。オウズウエルの視線がエイダオースから自分に移ったのを感じて身がすくみあがりそうになった。

「ネズミよ・・・目障りなのだ。貴様は我々にとって所詮ネズミ、取るに足らない存在だ。しかし我々の計画にうろつかれては気分が悪い、命が惜しければ今後我々には楯突かないことだな・・・」

《・・・っ!？》

刹那、男の背後から巨大な光線が三本、まっすぐに向かって飛び出す。一瞬のことだった、なんとか光の筋を交わすものの爆発的な力

で優の体は数メートル飛んで落ちた。

「次に会う時は容赦はせん・・・せいぜい逃げるんだな、虫けらよ」
男はそう言い捨てて、ぼろぼろのそれを乱暴に掴みどろりと影とな
って消えた。

消えた瞬間、飯島は吹き飛ばされた優に向かって走り出していた。
見えた光線は三本、一本は優、一本は確実に自分のいる木に向かっ
ていた、気がつかれていたのか、それよりももう一本の向かった先、
あれのおぞましさを理解した。使えないなら始末しようってのか、
エイダオースは避けたようだったが・・・
純粹に恐ろしかった、まだ強くならなくてはいけない、そうでなけ
れば奴らは倒せないのだ・・・



「大丈夫か？」

頭が痛い。視界がぼやぼやしている、生身のまま転がってたら怪我
してそうだったな、と漠然と思って、飛び上がった。

《い、飯島さんっ！敵！敵はどこです・・・「もういないよ」・・・
そう、ですか・・・》

優は少し驚いたような、そうして武装を解く。当たり前だがあまり
元気な様子ではなかった。

やはりダメか、と飯島はアルマダを突き返されるのではないかと思
った。やはり一人の少女には重すぎた責任か、やっつのことで見つ

けた適合者、惜しいが彼女の身の安全を守ってやれる自分ではない。

「椎名……」

優はじつとその攻撃の跡を見ていた。抉れた地面は生々しく、焦げた臭いがした。優の腕は震えていた。

「……椎名、すまない」

何もいえなかった。返されるであろうそれを受け取るため、飯島は優の前に掌を差し出していた。しかし、見上げた優の表情に怯えはなかった、酷くまっすぐで、正視することがなぜか恥ずかしいくらいだった。

飯島の手を握り立ち上がる。少しだけバランスを崩したが、すぐにしっかりと立ちあがった。

「椎名……嫌だったら、やめてもいいんだぞ」

「……」

「怖くないのか？」

「怖くないわけ！……怖くない訳、ないですよ……だからってやめていい、だなんて言わないで下さい！飯島さんは、他にあて、ないんですよ……？」

それは、言いかけて飯島は詰まる。これを使えるものは酷く限られている。いくつもの町を巡って漸く見つけた一人だった。しかし他人の生活を奪うことなど、流石に出来なかった。

「勝手ですよ、無理やり押し付けて、今度は返せ？嫌ですよ、なんでもかんでも勝手に、勝手に自分の中で完結させないで下さいよ！確かに・・・あんなのと正面切って戦うのは怖いです、けど・・・」

「俺も戦えればいいんだが・・・」

「けど、飯島さんだけの問題じゃありません。私がやめたって、きつといつかあいつらは私たちの前に現れます。だからこそ今日ここで遭った・・・誰かがやらなきゃいけないんです。私、逃げませんから。出来るだけ、やってみるつもりですから。それに・・・今日だって飯島さんがいなかったら私、あいつ・・・エイダオースにやられてました。飯島さんがこうして、コート泥だらけにしてくれなきゃ、勝てませんでした。あ、そういえば皆を避難させてくれたみたいじゃないですか、ま、もう少し早く来てくれたっていいと思いますけどね！」

「椎名・・・ん、お前・・・！まさか！！」

に、と目の前で笑う優にかつとなった。こいつ、まさか、気が付けば胸倉を掴んでいて、

「お、おまえなあっ！いたんならもつと早く助けてろよ！」

「だって来るの遅かったし」「そういう問題じゃないだろうっ！！くそっ、あと口調を変えるんならもつと上手くやれっの！！アホかお前！あゝっ！」

「ああっ、ぶ、ぶつことないじゃないですか！一応ビークと一緒にエイダオースも倒したんですから、ほら皆助けられてハッピー？みたいな」

「・・・・・・・・っ」

「ばかやろおおおお！！！！」

人気のない公園の中、男の怒鳴り声が木霊し、木を揺らした。



暗がりの中、男はぼろぼろになったそれを投げ出す。随分と苛立った様子なのが目に取りれ、関わり合いになりたくない、と影の中いくつかの塊が逃げるように散っていく。

「エイダオースよ、お前には失望したぞ！しかし私も鬼ではない、傷を癒すのだ。時が来たらお前にはもっと相応しい任務をやる、消されなくなったら自分のことをもっと理解するのだなっ！！」

エイダオースは怯え、のろのろと暗闇の中へと消えた。ふん、とオウズウエルが鼻を鳴らせばそこには一人、面白がって説教を聞いている男がいた。

オウズウエルがその男の存在に気が付いてない筈などなかったが、

「オウズウエル様が手を煩わせるほどの物件ではないと思いますがね」

私めが、と蜂のような男が胸に手を当て身を低くする。他の者に比べいささか堂々としたその男はぎらぎらとした目を細めじっとオウズウエルを見た。

「ビークにエイダオース、放って置いていいものではない。他の者に任せていつまでもぐだぐだとされては困るからな。閣下のご命令、あまり事を大きくしてもらっては困る」

「私めをビークたちのような下っ端と同じように思われているのですか？」

「そうではない・・・が、確実に次は殺す。ギルステイン、お前の力は評価するがお前みたいな悪趣味な奴に好き勝手させるわけにはいかない」

悪趣味とは失敬な、と気を悪くした様子もなく男は言い、闇に消えた。オウズウェルは何もない闇を睨むばかりである。次は私がじきじきに息の根を止める、全ては閣下の大意を成就させるためにも。

05＊鉄の翼は日に当たる

奇妙な音がする。

暗い部屋の中、窓はなくまさしく箱と言った空間の中にその生き物はいた。

己が自由の為手足に嵌められた鎖を切ろうと生き物は来る日も来る日も必死になって体を動かしていた。

いつから同じ事を繰り返しているのか、じやりじやりと鎖が音を立てて、そして止む。何千回と繰り返されたそれ、生き物は次第に自分の救いのなさを理解する。

しかしそれでも生き物はこの無駄な行為をやめることはない。それは生き物に唯一残った生きたい、という至極当たり前の欲求によるものだった。他の欲もあった気がする、しかしそんなもの、とうの昔になくしてしまった。

自分がかつてどう在ったかも知らぬというのに。

いつものように体力の続く限りもがき、現実絶望し、地に臥していた時、生き物に転機が舞い込んできた。

「ふむ、これはこれは……」

その時々々に生き物は意味のある言葉を聞く。疲弊し、腹がすいてるかどうかさえ分からなくなった生き物は体を動かすこともままならずちらと声のしたほうに眼球を動かすので精一杯だった。

何かの虫のようなそれはじろじろと値踏みするように自分を見て、そうして一言二言面白い、だの感想を漏らし力なき生き物の目の前に座り込んだ。

「自由になりたいか？」

「お・・・俺は・・・一体・・・」

「フフ、言葉を話す程度には体力が残っていると見える。もう一度言いましょう、自由になりたいか？腹もすいてるだろう、外に出ればお前の好きなことができる」

好きなこと、生き物は反芻した。虫はぎらぎらと目を光らせて鎖に触れた。忌々しい音、生き物は低く唸った。

「私の言う通りにするならば・・・今すぐこの鎖を取ってやりましょう」

愚問だ、そんなもの拒みようではないか、と。生き物は鉛のような体を起こし頼む、そう言って鈍く光を返すその腕を男に差し出した。

05..鉄の翼は日に当たる

あれから数日、敵に遭うことも大量殺人やら原因不明の事故のニュースを耳にすることはなかった。あの後結局学校側からは10日の休校を言い渡された、あれだけむちゃくちゃになったのだ、校内を整備するだけでも色々大変なのだろう、普段だったら大喜びしていただろうが今回は状況が状況だ。

話を元に戻そう、あの公園での出来事から毎日飯島さんを見回りをしていたのだが情報らしい情報はゼロ、流星に毎日戦うのは遠慮し

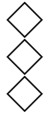
たいけど、こう無闇にパトロールするのもあまりいいものではない。飯島さんも思うことがあったのか、一日くらいは自由にしてもいいだろうと言いついてこうしてその空白の一日が来た。

休みが決まった時すぐに友達からのメールが何通も来た。内容は勿論遊びのお誘いなのだけどあいにくと何処からかその情報を仕入れてきた飯島さんから分かってるよな、という恐ろしいメール、ある意味お誘いなのだけど、そんな有無を言わさない文面が来たので泣く泣く断った。もっと前から休みをくれるというのなら予定だつて組めたのに、と飯島の適当さを呪った。

詰まるところ時間をもてあましていた。休みを貰った時はあれしようにこれしようと凄く喜んだ気がするがいざその日が来れば何をしたいのかが分からない。強いて言うなれば早く学校に行きたいのだけど。

ごろりとベッドに寝そべる。ふと思う、もしかして自分はこのありえない日常に身を置き過ぎて頭がおかしくなってるのではないかと。曲がりなりにも高校生、その普通の高校生が怪物と戦っているのだ。ここ数日は見回りして、戦ったりで疲れて帰ってすぐ寝ている、女子としてどうなの、バイトだって飯島さんがドーコー言うせいで辞めちゃったし、休み明けにあれ、椎名さんなんだかワイルドになったね、なーんて言われたらおしまいである！女の子らしいことをしなければ、とこういう時女子は思うのだ。思い立ったが、という訳でベッドから転げ落ち拳を握る。

「シャワー浴びたら外出しよう！」



繁華街を行きながらふと思う、飯島さんは今頃何をしてるのかな、と。そういえば飯島さんは一体何処に住んでいるのだろうか。

話を聞く限りここに来たのはつい最近らしいが、飯島さんは個人的な話をあまりしたがない。飯島さんは何かと私の情報を調べているらしいが飯島さんのことを私は全然知らないのである。知ってることは怒りっぽくて無茶苦茶で、かといえはたまーに優しい、そんなこと位。どんな仕事をしているのかも知らないがお金だけは沢山持っているようだった。あの一件で壊れた携帯を見て飯島さんはなんとということかお財布から何枚もお札を取り出し必要だろ、そう言っって私の手に握らせたのである。

当然断った、しかしながらあれよあれよと言ってる間に手元にはひび割れたピンクの携帯は消え去りピカピカの所謂スマートフォンとやらが握られていて。羽振りのよさに店員に勧められたカバーも買ってと言ったけど当然のように却下された。その代わりかは分からないけどお昼ご飯を奢って貰ったが・・・とにかく敵以上によく分からない人であった。一体飯島さんは何者なのだろうか。

「まあどうせ聞いたって教えてくれないんだろうけど・・・」

町の中は秋の風が吹いていた。つい最近まで半袖短パンだったけどもうすっかり秋なのだと改めて思う。適当にコンビニで新商品のお菓子を買ったたり、ドラッグストアで何十分もうろうろして目当ての化粧品を買ったり、行き当たりばったりでお店に入っていく。ちらりと携帯を見るも時間はあまり経っていない様でいっそのこと映画でも見ようかななんて映画館に向かうもめばしいものは一つもなく。

（もう家帰ろうかな・・・あ、ツタヤ寄ろう、で、映画見る）

そう思って来た道をUターンしようとして向かいの道路に敬の姿を発見する。声をかけようにも随分遠くなのだが、どうして街中であんなに急いでるのだろうか。やっぱりデートかな、なんて想像した刹那、優の思考回路は一気に遮断された。

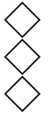
ゴオオオッ！！

吹き抜けたのは一筋の突風である。ジェット機が飛んだのかと錯覚してしまいそうなそれ、そして自身を覆った黒い大きな影。心当たりがない筈はなかった。とっさにそれが消えてった方向に走りながら耳に携帯を当てていた。

発信をするものの飯島さんは出ない。肝心な時に出ないんだから、と怒りながらメールを打ち鞆にしまう。

あの速さだ、追いつけるとは微塵も思っていなかったがこの先が直線なのと目的があるならば必ず何処かで留まる筈、そう思ってペースをあげていく。何処に行ったのか、辺りを見回して視界の端を横切る影。とっさに上を向けばビルの上空へと姿を消してしまった。高いところに行かなければ、そう思い目についた商業ビルの中に入る。流石に壁を登る訳にも行かないし、どこかの屋上で変身して探していこう、携帯の画面を確認してみるも飯島さんからの返事はない。エレベーターは故障中のように飯島への愚痴を言いながら狭い階段を登っていく。

最上階には屋上に通じるドアがあった。鍵は無用心にも壁の掲示板の押しピンに引っ掛けられていたのほっと息を撫で下ろした。壊さなくて済んだ、と。どうやら一般的な感覚はもう駄目らしいとも思いながら。



恐る恐る屋上へと足を踏み入れる。学校と変わらない砂っぽいそこ、強いて言うなればコンクリートに刻まれた不気味なひびと狭さが気になるが、息を潜めて一步一步と進んでいく。

屋上と言うのはどうしてああもごちゃごちゃしてるのだろうか、設置された意味不明の建造物、用途など知ったものか。とりあえず敵はここにはいそうにない、そう思っただけから死角になりそうなところを探しているその時、ぐい、と何かに腕を掴まれて体が沈んだ。

突然の出来事に声を上げそうになるも言うより早く口に何かを振じ込まれる。それが化物の指だと気づくまでそう時間は掛からなかった。

それは、鳥のような姿をしていた。彼女には他に尤もらしい言葉は思いつかなかった。

神話の生き物にこれに似たのがいた気がする。名前は思い出せないが鷲の頭で、体がライオンみたいな・・・というもののその風貌の奇妙さは一目瞭然だった。鉄の鳥だ、巨大な鳥のようなそれ、人の形を成してるようにも思えたが鉛色の金属のような鱗が何枚も羽のように腕についている。羽毛とは呼べそうになかったが、鉤爪のような手足、そして今自分はそれの胸の中にいる。押し込められた爪は鋭く口の中を切ってしまいそうだ。

探していた怪物はこれだったのか、しかし、優はこの奇妙な違和感に戸惑いを隠せなかった。

とげとげのお腹も、背中に覆うように置かれた翼も、嫌な感じがしない。恐ろしいはずのそれ、翼のせいで顔はよく見えないが傷つけようという意思は全く感じられなかった。いや、むしろ怪我をさせないようにと鱗をそばだてないようにしているようにも感じられた。鳥は優を拘束したまま息を殺している。足音が聞こえる。近くで何

か探すようにその足音は続いた。

「……いないか……」

声が聞こえた気がした。まさか、と思ったその時、錆の様な臭いが一際強くなった。鼻が濡れている。それが自分を覆う生き物の体液だと理解した。血を流している。鱗の隙間から黒いものが滲んでいた。

足音が遠のいていき、消えたとき、突っ込まれた指が引き抜かれて優はそれの顔を見た。

「貴方……」

やはり鳥のような頭。金属の羽毛の中、鋭い赤い目が二つ。恐ろしいはずなのに、優は奇妙な感覚だった、両足を不安定な紐の上に置いたようなその感覚に我を忘れていた。

「怪我……してる」

日に照らされた身体の出血は酷い。いくら身体の作りが人間のそれと違うとしても放って置いていい代物ではなかった。熱に浮かされたように手をそこに伸ばしていて、どろりとした感触がした瞬間胸を押し返される。

「やめろ……！早く行け！殺すぞ！！」

でも、そう言葉を漏らす優に怪物は唸った。しかしその声は弱弱しい気が付くと制止の声を振り切ってその傷を負った生き物の前に跪いていた。鞆から何か血を拭ける物はないか、と。いつも入れている長いタオルを取り出して。血を流すそこにそっと当てる。テーピン

グの類はよくするが出血の手当てなどしたことがない。自分が正しい処置を出来ているか自信はなかったがこのままだともっと血が出てしまうような気がして、怪物は酷く大人しかった。黙って私を見ていた。

「どうして・・・怪我してるの？」

「お前には・・・関係のない話だ、命が惜しいのなら俺のことなど放っておけ！」

「殺したかったら最初から殺せばよかったんです・・・それを貴方はしなかった」

怪物の顔が歪む。見極めたかったのだ、彼が、心を持っているかと。きつとさっきの男にやられたのだ、相手が何者かは知らないが、そして私をそれから守ろうとしてああしたのだと。叫ばれては不味かったからそうしたのかもしれない、でも、優は知りたかった。彼の行動はどうしてそうなったのか。

「名前」

「え？」

「名前、なんていうんですか？」

お前には関係のない話だ、と。黙って血のついた鱗を清めっているとグリゴア、と彼は呟いた。悪い人ではないのだ。そしてきつと彼を襲ったのは悪い奴だ。

「お前は・・・俺を恐れないのだな」

不意にグリゴアが言った。初めての問いかけだった。優しいじゃないですか、そう言って鱗に覆われた顔を撫でていた。姿なんて関係ないんです、笑ってみせる少女、怪物にはそれが信じられなかった。しかし、心地よいとさえ感じている自分もいた。その時である、

殺気、今までずっと対峙していたそれを強く感じた。狙い打つようなその感覚、少女は気が付いていないのか、とっさに身体の後ろに隠し、這い出ようとする女の体を壁に押し付けた。

目の前にはあの男が居た。きらきらと光る目は依然樂しげで狂気さえ覚えた。いつの間に現れたのか、凍りついた場に少女も気が付いたのか、背中で小さくなっている。

「腹に穴を開けてやった筈ですが・・・あまり血が出ていませんねえ」

両腕を組んで虫が笑う。このままではこの娘まで巻き込んでしまう。グリゴアは娘に情が湧いていた。しかしこの男から逃がしてやることなど自分には出来なかった。

一步、男が二人に近寄る。身を硬くした。何がおかしいのかにんまりと目を細めてこちらをじろじろと見ている。

「あまり逃げられては困る・・・こちらも任務なのでね」

「や、約束が違うだろう！自由に、するって・・・！」

「約束？いくら私でもオウズウェル様のご命令には逆らえませんのでね、出来損ないには正式に処分が決定したのですよ！それこそが私がお前に与える自由・・・」

何か言い争っている。優には何が起こっているかわからなかった。ただこの薄気味悪さを作っているのが彼をああした元凶なのだと、腹に感じる鉄の手は優しく、しかし強く自分に触れていた。

「頼む・・・お前がそういうなら。それでいい。だが・・・」

「見逃せと？その隠してる虫けらを？」

男は一際大きな声で笑った。ありえない、そう言って一歩、またにじり寄る。

「人間に何をされたというのだ？たった一匹の虫けらの為に死んでもいいと言うのです？結構！美しいではありませんか・・・」

「ぐ、ぐりごあさ・・・」

止めなければ、今すぐ変身しなければ、そう思った、しかし、飯島さんの言葉を思い出す。その躊躇が彼女を絶望させた、生ぬるい液体が膝を濡らしたからである。

「え・・・？」

何かが、鱗で覆われた背中を貫いている。鋭い何かはグリゴアの手を貫き一歩手前で止まっていた。

どさりとそれが崩れ落ちる。彼は最後何も言わなかった、死ぬこととはこんなに簡単なことなのだろうか。

頭は真っ白になる、苦しげに血を吐く彼に助かる術などないことなど分かっていた。

気が付けば目の前が滲んでいる。泣いてた、彼は化物だ、でも、心

がある。

逃げる、そう搾り出された言葉。でも、鉄のような腕に触れるもグリゴアは動かない。

どうして、どうして、そう泣き叫ぶ優は背後の男の溜息にぞっとした。きつと振り向いてそれを睨み付ける。スズメバチのような男が酷く楽しげに、そして恍惚とした様子で二人を見下ろしていた。

「おお・・・」

「貴様っ・・・・・・・・」

「何故そんな反抗的な目で見るのです？ 貴方の命が助かったのですよ？」

「許さない・・・・・・・・！」

「ユルサナイ？ 何を言っているのですか、グリゴアは貴方を助けるために自ら命を捨てたのです、ふふ」

こいつ、何を言ってるんだ。優はその男が狂気の固まり以外の何者ではないと思った。楽しんでるのだ、命をもてあそんで。倒さなければならぬ、しかしそれは私に対して何の殺気も向けてなかった。逃げられる、体制を立て直したほうがいいと飯島さんなら言っただろう。しかし、許しがたい存在だった、怒っている自分が居たのだ。

ギルステインはその時愉悦に満ち溢れていた。暇つぶしには丁度いい余興だったのだ。下らない茶番も見れた、しかしそこで思わぬものを見つけたからだ。

「・・・逃げないということですか？」

少女は依然こちらを睨んだままだ、体は小さく震え、目には涙が溜まっている。酷く彼の劣情を刺激した、殺してしまおうか、この娘は死ぬときにどんな快樂が自分の体を巡るのだろうか。

「……っ、ぜったい、許さない……」

いや、とギルステインは針を収めた。何かここで殺してしまうには惜しいように思われた。グリゴアがわざわざかばった、確かにこの娘、自分達を見て叫び声すらあげなかった。このように立ち向かってくるのも見たことはない。そのような人間を見たのは彼にとって始めてったし、そう思慮を巡らしてるうちに女を掬い上げていた。

「そう怖がらないで下さい、なあに貴方の命を奪うなどそんな愚かな真似はしませんよ」

怪物の表情は依然と恍惚としたままだ、言いようなない恐怖、体は完全に震えていた。殺される、

「ただ少し分かりました……私は貴方に興味がある、貴方ならば私の気持ちを満たしてくれそうな気がする……！」

女王様、と。ぬるりと口に何かが押し込まれた。何を、しているのだ？何を、して……

乾いた音がした。手のひらが赤くなっている。拘束はもはやなく、静かにそれがこちらを見ていた。

必死に逃げ出していた。脳裏に刻まれたあの光景、目の前が黄色と黒で覆われて、悪寒がした。息が上手く出来ない、何を、されただ。真っ白の頭の中逃げるように走っていた。

「椎名！」

腕を掴まれて、反射的に払いのけていた。そうしてはっとした。

「お前・・・酷い顔だぞ・・・」

優の目に涙が一層浮かんで、体に衝撃が走る。しがみつくように、そうして何も言わず子供のように泣き出した。言葉も言えない様で、周りに奇異の目で見られるも、どうすることも出来なかった。何かあったのか、そう尋ねれば嗚咽を漏らし返事と言う返事は出来そうになかった。ただ悔しそうに、泣くばかりであった。

怖かった、しかし本当に許せなかったのは彼が殺されるのを黙ってみていた自分なのだ。濡れた唇をなんども擦り涙を飯島のコートに刻んだ。服には黒ずんだ血の跡がこびりついていた。



残された屋上で、男は酷く楽しげだった。あの女、予想以上に楽しめそうだ、そう殴られた頬に触れて顔を歪めた。出来損ないの死体を足で蹴飛ばす。今までにない感情の高ぶり、虫けらを殺したり、嫌がる女を犯し、腹を裂いてやったのとは比べ物にならない愉悦。

「ほしいものが見つかったぞ・・・」

必ずや我が物にして見せましょう女王様、そう言って蜂はその死体を突き落としたのだった。

06＊バレット、もう一つの

顔に何か暖かいものが触れた。流れるそれが唇に触れる、鉄の味。その時自分に何か覆いかぶさっているのに気が付き少女は絶叫した。

グリゴアさん、少女は震える声で言った。助けなきゃ、そう思うものの体は石みたいに動かない。
ぬるぬるとしたそれが少女の体を汚し、服を赤く染めていく。嫌だ、嫌だ、嫌だ・・・！

「女王」

ぐいと、体が浮かび上がりぎらぎらと光るそれが少女を映す。嫌だ、そう強く思っているはずなのに体は人形のように、男に抱かれたそれは自身の唇に触れる感覚と背中肉を裂かれる痛みに声無き叫び声をあげて、意識を失った。

06…バレット、もう一つの

はっとして、これが夢なのだと、震える腕を押さえて優は目を覚ました。

そして違和感に辺りを見回す、ここは何処だろうか。妙に小奇麗なその空間は高級感のある椅子やら、綺麗な額縁に収められた絵画やら、

「ホテル・・・？」

もぞ、と視界の端で何かが動いた気がした。何かと過敏になっていたからか、とつさに後ずさりそして安堵した。見慣れた人がそこに居た。静かに寢息を立てているのは飯島だった。もしかして飯島さんはこんないところに毎日寝泊りしているのであるうか、そう思った時ふと自分が何故こんなところに居るのか先ほどの疑問が浮上し他の思考を押さえつける。昨日は、必死になって逃げて、飯島さんに会って・・・その先はどうしたのであろうか。記憶が全くと言っていいほどない。皆無だ。

さっと血の気が引くのが分かった、探るようにベッドの上から辺りを見回せば自分の鞆。慌てて携帯の電源を入れれば不在やらメールが何件も。嫌な予感がする、恐る恐るそれを開けば母親の心配する文面、何処にいるの、泊まるのなら連絡くらい寄越しなさい、と。ずらりと続く母の名前の中、二つ三つ現れる皆川敬の文字。開けば同様に何処にいる、昨日の自分、少しくらい明日のことも考えてくれよ！しかしあの後自分がどうしたのかも覚えてないのだ、その時ふと声が聞こえた。

「・・・はる、か・・・」

振り向く、が飯島さんはごろりと寝返りを打つばかりだ。寝言か、と妙に落ち着かない自分が嫌になりながらもメールを開く。電話のほうがいいような気もしたが動揺を隠せなかったらと思うと気が進まない。なるべくいつも通り、そう思いながらバッテリー落ちちゃって気が付かなくて、今友達の家に住る、こんな内容のに適当に絵文字を挟みつつ送信して一息、送信中のディスプレイを見ながら昨日のことを思い出す。

グリゴアさんは最初から助からなかったのかもしれない、この間の

赤い奴と同じような雰囲気を感じられた、あんな酷い怪我をしたのが、見つからなくても出血で死んでいたのではないかと。

けれど自分は只守られていることしか出来なかった。飯島さんは自分の取った行動を正しいとするだろう、しかし、あの人は私を庇った、優しい人だった。あの蜂と同じ敵なのかもしれない、けど皆が皆恐ろしい風貌をしているからといって悪い人ではないのだ。

そういえば、と胸に触れる。血痕が無い。よくよく見れば昨日の服装と違う。ぶかぶかのシャツは汗を吸っていたが、その時鼻を掠めた煙草の香にまさか、と。ちらりとベッドの中の飯島さんを見るも未だ夢の中らしく、逃げるようにベッドから抜け出してバスルームに飛び込んだ。



べたつく体を念入りに洗っていた。胸の辺りにはやはり赤黒いそれがこびりついていて。夢だったらよかったのに、頭の中をフラッシュバックするあのおぞましい感覚に口を拭った。あいつは、あの状況下でキス、した。キスといえるのか、口の中を蹂躪したあの生ぬるいそれ、思い出さないようにしようにも頭の中がどんどん真っ黒になっていく。いろんな気持ちが横切り、互いに交じり合う。怖くて、目の前の狂ったそれが信じられなく、そして泣きたい気分になった。

とりあえずお腹もすいた、あまりこのことは思い出さないようにしよう、と。ふかふかのタオルに顔をうずめてきばきと拭いていく。不意に背中が気になって鏡越しに見るも別段何もおかしいところはなくほっと胸を撫で下ろした。

おはよう、視線があって早々ぼさぼさの頭をした飯島が言った。な

んだかいけない物を見るようで、恥ずかしそうに優もおはようございます、と返した。沈黙が流れ優の長い髪から雫が一つ落ちて、カーペットに吸い込まれた。飯島さんはじっとこちらを見ながらぱりっとしたシャツのボタンに手をかけている。

「・・・飯島さん、こんないいところに住んでたんですね」

てつきり狭いアパートにでも住んでるのかと思ったのに、優の飯島はあまり反応を示さなかった。昨日はあんなにびーびー泣いてたくせに、内心はそう愚痴を零していたのだが昨日のあの様子を見ては強く言える気もなかった。

「住んでるからなんだって言うんだ。別にたいしたことじゃないだろ」

「はぁー!? ホテル住まいが大したことないとか頭大丈夫ですか! あと私の服! 返してください!」

「おま・・・いや、あーもういい。腹減ってんだろ、下で飯食うぞ。そのついでに服を取りに行く」

朝からこんなやかましいとは思わなかった。だぼだぼのシャツにすこしよれたスカート、あまり人目に晒していいものではなかったが、何か食べさせとけば元気も出るだろう、そう思って追いやるように背中を押し、文句を言う優をエレベーターに押しやり、自分も乗り込む。ぶすつとした表情でこちらを恨めしげに見る優。一緒に乗っていた青年に奇異の目で見られる。自分だって好きでこうやってる訳ではないのだ、勘弁してくれ。

ちん、とエレベーターが止まりドアが開く。よりによって高いほうのホテルですか、厭味ったらしい、とぶつぶつ言うのが聞こえたが

さつさと歩いていけば後ろでもう、と苛立ったような声がしてぱさりと腕に髪が触れた。

「おい・・・あんまくつつくな！」

「い、飯島さん、好きなもの食べていいんですか！」

「おうよ、つーかビュツフェなんだから当たり前だろ・・・」

分かりやすい奴、目をきらきらさせる優の背中を押し自分もコーヒーを取りにいく。ふと思いつく、昨日の優は酷い有様だった。着信に気が付くも何処にいるか分からない。すぐに気づいてやればよかったのだが、探そうにもどうしようもなく、町をうろついている時走っていく優を見かけた。なんとか捕まえてみれば酷く怯えた様子で、自分の顔をみた途端青ざめた顔からぼろぼろと泣き出してそのまま自分の胸に頭を押し付けて泣いていた。理由を尋ねようにも酷く錯乱していて、辺りの奇異な視線に耐え切れず仕方なくホテルまで連れて行けば気が付くと寝ていて・・・。あんな風に子供をあやしたのは久しぶりだった。いや、あんなでかい子供、とぼんやりしながらコーヒーを口に運ぼうとして酷く上機嫌な優が椅子を引いた。

「飯島さん、朝ごはん食べないんですか？」

「んー？ いや、・・・なあ椎名」

「いい、飯島さん！ ふわふわのさくさくです！」

「おい・・・大人しく食べれないのか」

だって、と依然目を輝かせる優が身を乗り出す。昨日のあれはなんだったのか、にこにこことクロワッサンを口に運び、ベーコンやら、スクランブルエッグやら、もくもくと食べている。酷く機嫌がよいように思えたが、ふとフォークを置いて動きを止めてしまう。カップの湯気が視界を曇らせた。

「・・・ごめんなさい」

別に気にするな、飯島にはそれが精一杯の言葉だった。感謝の言葉は何かにつけて聞いていたがごめんなさい、なんていわれるとは思ってなく、少し動揺したのもあった。

「で、昨日はどうしたんだ」

「・・・私、メールしたじゃないですか、あの後、見つけたんです、怪物。最初はびっくりしました、けどその人、怪我してたんです・・・近くにもう一人いたんです。その人に多分追いかけられてたんだと思います。屋上で、あの人は・・・庇ってくれたんです。あんなに、・・・あんなに血が出てたのに。自分が死ぬかもしれないのにあの人は敵に、私を殺すなって言ったんですよ」

「椎名」

優はそのままゆっくりと少しずつ昨日のことを話した。最後のことは口にする気が起きなくて黙っていたのだが、そうして一通り話し終わった後、冷めたコーヒーを口に含んで飯島は予想通りの言葉を吐いた。間違っていない、それでいい、その言葉に少しだけ安心感を覚えたがやはり自信を持てなかった。私はあの時もっと他に出来ることがあったのかもしれないと。

「しかし・・・その蜂みたいな怪物、大分危険人物なようだな」

「あいつおかしいんです、ずっとにやにやしてて・・・」

「何もされなかったのか？」

はい、優は苦々しく言った。嘘をついてしまった。しかし、あんなこと。思い出して悪寒が走った。飯島さんにはばればれなのだろうけどそれ以降何も聞いてこなかったのは飯島さんなりの優しさなのだろう。その男には一人では立ち向かうな、どんな敵かも分からないのだからそう言って念押しされたが。

出来ることならば二度と会いたくなかった。いつか必ず対峙する時がくるだろうけど、必ずあいつは倒さなければならぬ。彼の為にも。



オウズウェルは酷い有様だ、とそれを見た。ぐちゃぐちゃと粘着質な音が辺りに響いていた。辺りに充満する血肉の臭い、あまり気分のいい場所ではない。

「・・・悪趣味だな」

「オウズウェル様が堅物すぎるのですよ、他のものだって同じようなことをしています」

「ギルステイン、お前という奴はどうしてそう・・・この間の失敗作のことだ！何故逃がしたのだ！後始末はお前にさせたからあま

り多くは言わないが何故そう事を大きくしようとする」

ギルステインは手に持ったそれから指を引き抜いた。ずるりと粘液と共に細長い管が出てそしてぶちりと千切れる。どろどろとしたそこから血やら、すえた臭いやら、とても心地のいいおいとは呼べない代物のそれが部屋を満たしていく。

「オウズウェル様・・・私めは貴方の部下ではない。私が始末したのだからよいではありませんか、ねえ？オウズウェル様」

「ふん！勝手にしろ・・・しかしその気味の悪い趣味も大概にするんだな！使い道のあるものをこうしてぐちゃぐちゃに撒き散らして！」

オウズウェルは苛立ったようにそう吐き捨てさつと背を向けた。いちいち小煩い奴だ、そうしてギルステインは足元で転がるそれを掴んだ。人間だったそれ、彼はこうやってしばしば町から許可もなく人を攫いそれを捌った。犯したり、男女を目の前で交わらせそのまま殺したり、体をばらばらに引き裂いたり、彼の言う悪趣味、それはギルステインの欲望を強く満たしていた。しかし、

「・・・女王」

指先についた肉のかけらを舐め、ギルステインは切なげに口にした。すでに彼の興味は別のものに注がれていた、殺したら、それで終わり、今まではそうだった。一番自分が気持ちよくなれるそれに従ってきた。しかし、あの女にはそれをしなかった。捌って終わりでは勿体無い気がした、我々に臆することなく失敗作にああまでさせた、そうして死ぬと分かっているにも関わらず立ち向かった。

何かある、と。ギルステインの本能ともいえるその直感は間違っ

はいなかった。

死肉を握りつぶす。彼女に自分の愛を捧げなければ、最もよい快樂の形を探し出し送らなければ、運命めいたそれを感じギルスティンは身を震わした。



町の空気は不穏だ。自分には空気が澱んでるのが痛切に感じられた。自分に任された使命なのだ、じゃき、と手に持っていたそれを鳴らす。

男が持っているのは拳銃に似ていた。酷くごてごてとしていてただならぬものではあったが。

「全く・・・どうしてこう、大人しくしてくれないんだ」

ゆっくりとそれに忍び寄る。部屋の中の様子は分からない、ただ分かるのはここ一体を覆う不快感、空間の歪みがそこにはあり、そして憎みべき敵がいた。

平和を脅かす魔物である。自分はいっつを殲滅するためにあれを受け取り戦うと誓った。

ドアを蹴破り強引に押し入る。黒い蜘蛛の様なそれが室内には何十匹もいた。それが子供やら女やらを空間のゆがみに押し込んでいる。すぐさま銃を構え臆することなく撃っていく。

侵入者に気が付いた機械どもはすぐさま立ち向かってくるが、男の弾丸に当たるや否や粉々に散った。人に当たらぬように打ち込むのもお手の物であった。まずい、そう思ったのだろうか、残った虫はばたばたと逃げるように空間の穴へと逃げ込み、そして消えた。

ふう、と緊張を解く。気絶した人々をそつと横たえて早々に部屋を後にする。

（あいつらの狙いはなんなんだ・・・）

このような雑魚の始末は苦痛ではない。しかし、男の言葉を思い出す。突然現れたその男は自分の正体を知っていた。いや、どちらを正体とするかは難しいが。

（メリットを考えるならば心強いかもしれない）

一匹狼を気取る気は更々無い。あっちが軍団ならこちらだって徒党を組んだほうがいいのは当然だ。

守りたいものがある、男は渡されたメモを見てビルから姿を消したのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3795z/>

アルマダ！

2011年12月19日11時57分発行